

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

至仏山東面登山道利用実態調査報告書

はじめに
至仏山東面登山道の現状、登山の状況、登山者の意識等の調査結果について述べる。
問題点として挙げられる事項は、登山道の整備不足や、登山者の意識の変化等である。

本調査では、至仏山東面登山道利用実態調査を行い、平成11年7月に至仏山東面登山道利用実態調査を行った。調査に際する問題点を指摘してきました。また、登山者に対する調査結果も記載しました。以下に調査結果を示します。

調査員は地元住民で、地図を地図にてり、登山計画を立て、地図を読みこなす能力と登山経験とともに、調査員として必要な知識をもつて調査を行いました。

調査員の仕事内容
1999年7月実施
をもって決めていたが、調査員は、調査員として登場する所は、調査員が登場する所。

今回の調査は、内閣府森林資源監視委員会の造形地、越後高田市、上の若木市行田市各の山、また、大山の山、一帯の地名等も併せて調査を行った。地図における地図の構成の確認を行った。

調査員は、平成11年7月2日（金）～3日（土）
2日は戸島に参加し3日に日高分署を／天候：雨

調査場所：至仏山東面登山道（至仏山頂～「山の鳥」）
コース：調査地：一山の鳥～東面登山道（中間地点）～山の鳥～焼付地
調査時間：焼付地：8：00～山の鳥：8：00～山の鳥：11：00～

調査者：大森、新井、吉川、正木

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

日本自然保護連盟

日本自然保護連盟

平成 11 年 1 月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

代表 高橋 喬

担当幹事 永島 真

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年から閉鎖されていましたが、植生復元等が不十分のまま平成 9 年 8 月 1 日に再開されました。

ネットワークでは、平成 9 年 8 月に第 1 回の東面登山道利用実態調査を行い、平成 10 年 7 月に 2 回目の道利用実態調査を実施し、再開における問題点を指摘してきました。さらに、昨年初めて試みられた残雪期の登山道閉鎖期間中の利用実態調査も平成 10 年 5 月 16 日に実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は 1700 メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く折からの登山ブームと深田久弥の日本百名山としても有名で、年々登山者が増加しています。このため、登山道を外れて歩く入山者の踏み付けによる植生の破壊や裸地化の拡大と安易な入山による事故の増加が心配されています。

今回の調査は、再開 3 年目における登山道整備・植生復元等が、どの程度実行されているのか。また、入山者のマナー等の利用実態も併せて調査を行い、再開における問題点や今後の課題を考えてみました。

I、実施日 平成 11 年 7 月 2 日（金）～3 日（土）
2 日は戸倉に宿泊し 3 日に日帰り調査／天候：雨

II、調査場所 至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻）
コース：鳩待峠～山の鼻～東面登山道（中間地点）～山の鼻～鳩待峠
調査時間 鳩待峠発 8:00 山の鼻発 9:00～山の鼻着 14:00

III、調査者 永島 真（埼玉県児玉町）
松前 雅明（福島県郡山市）
清水 博之（群馬県高崎市）
山本 誠剛（群馬県安中市）

IV. 調査内容

1. 東面登山道の整備状況

今回の調査は、雨天のため、山の鼻から東面登山道（至仏山～山の鼻）を登り森林限界上部の標高1800メートルの「D地点」（別紙拡大図を参照）から中間地点にかけた限られた区域となった。従って、東面登山道の全体を調査できなかったことをまずお断りいたします。

山の鼻の至仏山登山口には、新たに入山者数カウントの赤外線センサーが設置されていた。至仏山の入山者を正確に把握する上からは必要なことであろう。

樹林帯の中の登山道は整備もしっかりとしていて、石が敷き詰められた幅広い道で歩きやすいが、急斜面の所々にある木の階段は急なうえ踏み板が水平でないため、雨のときは濡れて大変滑りやすい。今回も目の前でスリップした登山者を目撃した。

特に下りの時は細心の注意が必要である。「D地点」付近の登山道沿いの杭やロープはかなりしっかりと固定されていたが、岩石がゴロゴロしていて、足元は不安定で滑りやすい状態であった。表面的には昨年と同じような感じを受けるが、雨水による土壌の流失で登山道がえぐられて岩石の露出が目立ってきたのが気になった。

東面登山道には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇籠」が多数設置されているが、昨年と比較して、周りの土に埋もれつつあるのが分かる。

これはある意味では土壌の固定化や安定化に効果があるようにも見えるが、それだけ土壌の流失が激しいことを物語っていると考えるべきであろう。

なお、D地点の荒廃地内には木道の整備もしくは植生復元のために利用されるもと思われる木材（丸太・角材）が大量に荷揚げされていました。

2. 植生復元状況（D地点）

広範囲に裸地化したコース外の赤茶けた斜面（別紙拡大図の「D地点」付近）には、丸太による四角い囲み（2m四方が2箇所）があるが、ジョウシュウオニアザミやヤチカワズスゲ等の種子を播いたと思われるが、ここにも幼苗の緑らしきものは見当たらず、復元の様子は見とめられなかった。

また、現地は急傾斜地にも拘わらず、播種した種子の流失防止の「ワラゴモや竹串」も見当たらない。植生復元の実験計画によれば、平成8年よりポットに「ピートモス+現地の土の混合物」に播種する実験を行うとあるが、実際にどんな方法で植生復元を行っているのか、現地を見ただけでは不明である。

今回は、ミヤマナラ播種の小さな標識を2個発見する。昨年の本会、至仏山「東面登山道実態調査」報告書で草類ばかりでなく、樹木の植栽の必要性を指摘したが、今年はミヤマナラのドングリを播いたようである。今後の推移を注視して行きたい。これらの状況から植生復元作業は、ほとんど進展しておらず、極めてスローペース（実験の域）のものと思わざるを得ない。

昨年の報告書で述べたように、至仏山東面登山道再開の時期は閉鎖時点で既に決められており、確認調査を行ったとは言え先に再開日を決定してからの閉鎖解除では、本末転倒の再開であると言わざるを得ない。

また、植生復元の情報公開も必要である。入山者による踏み付けが植生に大きな影響を与え、復元には膨大な時間が掛かること、どのような復元作業を行っているのか等、入山者への啓蒙活動の工夫も必要と思われる。

(注) コースの整備状況および植生復元の状況は、別添の至仏山東面登山道「D地点」拡大図を参照下さい。

3. 入山者の利用実態

雨天のためか登山者も少なく、いわゆる物見遊山の観光客的入山者がいなかったので、総じて入山者のマナーは良かった。

しかし、雨に濡れた蛇紋岩は非常に滑りやすく、泥水の流れる登山道で下半身を泥だらけにして悪戦苦闘している入山者を見るにつけ、2000メートルを超える至仏山の利用方法（登山）について、謙虚に見直すべきであろう、と思わざるを得ない。

4. 入山者への指導・啓蒙

鳩待峠および山の鼻の登山口で、アンケートもとりながら入山者へのコース状況の説明や登山届の指導等を行いました。

アンケートに協力して頂いた4グループ（18人）は、いずれも至仏山は初めてであったが、残雪期の至仏山登山道閉鎖（平成11年5月11日～6月30日）や尾瀬が特別保護地区・特別天然記念物の指定を受けていることを知っていました。

V. 今後の課題と感想

1. 入山者増加への対応

まず、混雑期に山頂周辺では休憩や写真撮影等のために、登山道外の植生内への踏み込みによる植生の破壊が心配される。更に山頂付近での尿尿の問題も懸念される。昨年から始まった残雪期の登山道閉鎖は、今年も継続して実施されたが、植生保護の観点から極めて好ましい施策であり、高く評価したい。

しかし、その反動として夏季に入山者が集中する傾向が高まってくるであろう。交通の便が良く百名山として人気のある至仏山の入山者増加への対策として、植生保護も含めて、基本的には、まず「登山道を再閉鎖」すべきである。これが困難であれば次善の策として「至仏山の入山規制」を早期に検討・実施すべきである、と訴えたい。

また、尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は2228

メートルで、山の鼻～至仏山の標高差は830mもあり、れっきとした山岳地域である。蛇紋岩という硬く滑り易い急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。植生保護の外に、入山者の事故防止の観点からも、高齢者や山慣れない人には極めて危険なコースであることを、入山者や観光業者に対して更なるPRが必要である。

2. 植生復元への本格的な取り組みを
- 平成4年より専門家に委託して植生復元の実験を行っている様であるが、まだ実験の域を出ておらず、植生の復元はほとんど進んでいない様子である。アヤメ平の植生復元と比べて、東面登山道は急傾斜地に加えてと蛇紋岩という悪条件下では、いつになつたら緑が戻るのかは、はなはだ心配である。今回、ミヤマナラのドングリの播種個所を確認したが、今後の植生復元にどのような効果が出るのか不明であるが、多いに期待したい。
- 植生復元の状況を3年連続して調査した結果からみると、平成9年の登山道再開は、入山者を迎えることを最優先し、植生の保護および復元を軽視したものと言わざるを得ない。急傾斜地で裸地化した所は土壌の流失も激しく、岩石の露出し年々多くなり、このまま放置しておくと植生復元は、一層困難になるものと思われる所以、一刻も早い植生復元への本格的な取り組みを訴えたい。

まとめ

今年で3年連続（計4回）となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて思うことは、入山者の増加に至仏山（特に高山植物）が悲鳴をあげているのではないか、と痛感する。止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元作業など、難しい課題が山積している。一方、残雪期の登山道閉鎖の継続実行など明るい動きも見られるが、私達（入山者や全ての関係者）は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任がある。尾瀬の自然に対して、より謙虚に且つその保護に重点を置いた施策の実行が求められている。

「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬を、絶対にこれ以上観光地化してはならない。尾瀬には物見遊山で訪れる観光客に迎合する様な恒久施設は必要ない。尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な施策（マイカー規制の強化、登山道閉鎖、入山規制等）が、着実に実施されるよう願ってやまない。

以上

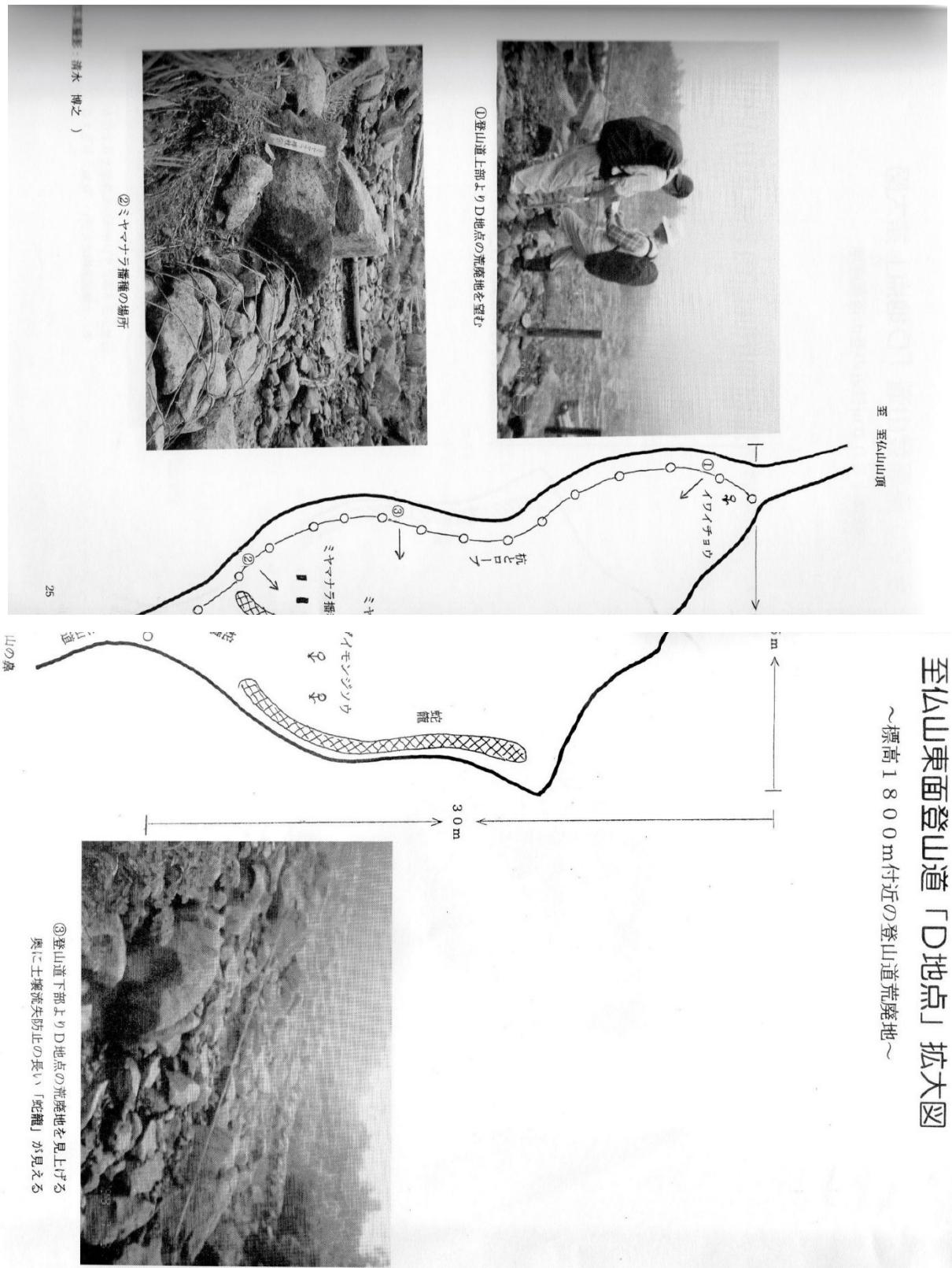
（補記）

今回の実態調査には、福島中央テレビの取材班（報道制作局報道部：松川記者）も同行し、実態調査の一部が平成11年11月8日の0：25「ドキュメント99」“戻らない…～尾瀬　あの木道の向こうに～”（日本テレビ系列）で放映されました。

至仏山東面登山道「D地点」拡大図

至
至仏山山頂

～標高1800m付近の登山道荒廃地～



平成12年11月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

至仏山東面登山道利用実態調査報告書

はじめに

至仏山東面登山道は、多くの登山・歩山道の部類・種別の中でも、平成九年より認識されていましたが、平成9年8月1日付で廃止されました。

本ネットワークでは、平成12年8月に奥多摩の東面登山道利用実態調査を行い、平成12年8月の平成11年7月末もそれぞれ実態調査を実施し、冉原における問題点を指摘してきました。さらに、残暑期の登山道閉鎖期間中（8月中旬～8月末）の利用実態調査も平成12年8月に実施いたしました。

本調査は蛇紋岩を主とする岩場を対象として、各調査所にて百メートル未満の登山情報の実態とともに知られています。また、至仏山は女子の登り最も多く歩くものの中でも上位に位置する日本百名山としても有名です。そのため、「危険」であります。このため、登山道を歩いて歩く入山者の踏み跡などをとるなど安易な入山による事故調査を実施してきました。

2000年8月実施

今度は、冉原4年目の実態調査ですが、前回までの調査を踏まえた調査が実施できなかつたことが心残りであります。以下に平成12年8月の至仏山東面登山道利用実態調査結果を記載いたします。

記

○実施日 平成12年8月4日（金）～6日（土）

○戸舗に向沿じて日帰り調査／天候：晴れ後雷雨

○調査場所 至仏山東面登山道（至仏山強一山の森～2.9Km）
コース：鳩待峰～小至仏山～至仏山～東面登山道～山の森～鳩待峰

○調査時間 鳩待峰発7：40～至仏山 11：15～山の森着 14：00

○調査者 佐藤 勝（埼玉県荒川市）

松前 誠明（埼玉県深谷市）

本戸 慎男（東京都足立区）

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

平成 12 年 11 月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書

尾瀬自然保護指導員ネットワーク

代表 高橋喬

担当幹事 永島勲

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年から閉鎖されていましたが、平成 9 年 8 月 1 日に再開されました。

ネットワークでは、平成 9 年は 8 月に第 1 回の東面登山道利用実態調査を行い、平成 10 年 7 月及び平成 11 年 7 月にもそれぞれ実態調査を実施し、再開における問題点を指摘してきました。さらに、残雪期の登山道閉鎖期間中（5 月中旬～6 月末）の利用実態調査も平成 10 年 5 月に実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は 1700 メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く折からの登山ブームと深田久弥の日本百名山としても有名で、年々登山者が増加しています。このため、登山道を外れて歩く入山者の踏み付けによる植生の破壊や裸地化の拡大と安易な入山による事故が毎年発生しています。

今回は、再開 4 年目の実態調査でしたが、雷雨のため当初予定した調査が実施できなかったことが心残りであった。以下に平成 12 年度の至仏山東面登山道利用実態調査結果を報告いたします。

記

I、実施日 平成 12 年 8 月 4 日（金）～5 日（土）

戸倉に前泊し 5 日に日帰り調査／天候：晴れ後雷雨

II、調査場所 至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻 2.9 Km）

コース：鳩待峠～小至仏山～至仏山～東面登山道～山の鼻～鳩待峠

調査時間：鳩待峠発 7:40～至仏山 11:15～山の鼻着 14:00

III、調査者 永島 勲（埼玉県児玉町）

松前 雅明（福島県郡山市）

本戸 信男（東京都東村山市）

牛木 一朗（東京都豊島区）

山本 誠剛（群馬県安中市）

IV. 調査内容

1. 東面登山道の整備状況

今年の調査は、至仏山直下の高ヶ天原付近から樹林帯に入るまで（標高2100m～1700m、時間11時：45分から約2時間）雷を伴う集中豪雨に襲われ、昨年重点調査した森林限界上部の標高1800メートルの「D地点」（別紙拡大図を参照）も豪雨の中の調査となつた。登山道は激流で川の様になり、下山するのがやつとの状況であった。従つて、東面登山道の全体の調査が十分出来なかつたことをまずお断りいたします。しかし、雨による土壌の流失が如何に物凄いものか、現地で確認できたことは大きな収穫であった。（別紙の各写真を参照）

「D地点」付近の登山道沿いの杭は倒れ、ロープは垂れ下がつてゐた。岩石がゴロゴロしている登山道は濁流で足元が見えず、足を移動するたびに自分のバランスをとるだけでも大変であった。

このような厳しい自然条件下では、雨水等による土壌の流失で登山道がえぐられて岩石の露出したコースを整備するのは並大抵のことではないと痛感した。東面登山道には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇篭」や「板・丸太材」が多数設置されているが、土壌の固定化や安定化にある程度効果があるのが確認できただが、決して十分ではない。

2. 植生復元状況（D地点）

昨年播種した「ミヤマナラ」の発芽状況も確認する予定であったが、「D地点」一帯は濁流に被われ確認することができなかつた。

3. 入山者の利用実態

南面登山道（鳩待峠～至仏山）には入山者が多かく、山頂は休憩する入山者で満員であった。雷雨が来そう空模様の為か、東面登山道に入ると入山者は少なくなり、いわゆる観光客的入山者は見られなかつた。総じてマナーは良かったと思われます。

茨城県の私立高校生の団体（80名程）が山の鼻から登ってきたが、隊列はバラバラで先頭グループと最後尾のグループの差は30分近くもあった。軽装で雨具も貧弱、夏とは言え豪雨の中2000mの登山はかなり厳しかつたことであろう。

泥水の流れる登山道と非常に滑りやすい蛇紋岩、恐怖の雷と豪雨で全身ずぶ濡れ。最初、下の方で鳴つていた雷も次第に耳元で鳴るようになってきた。山の鼻に向かつて高度が下がってきたことにより、雷雲の中に突入したようである。気温が急に低下し風も出てきて、身の危険を感じるほどであった。他の登山者とも連絡を取り合い、しばらく灌木帯内に避難しました。

森林限界付近（標高1700m）の登山道は、小石を敷き詰めた幅1メートルほどの比較的歩きやすい道であるが、濁流に被われて足の置く場所が見えない上に、流れ

が速く足をすくわれそうになり、極めて危険であった。そのため、登山道を外れてブッシュの中を歩く入山者がいました。（別紙の写真⑧を参照）

V. 今後の課題と感想

1. 入山者増加への対応

今回は雷による集中豪雨の中で感じた事を述べてみたいと思います。

尾瀬は誰でも手軽に行けると思われるがちであるが、至仏山の標高は2228メートルで、山の鼻～至仏山の標高差は830mもあり、れっきとした山岳地域です。

東面登山道は蛇紋岩という硬く滑り易い急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。今回は樹林帯内の東面登山道でスリップして転倒、手首を怪我した女性の入山者がいました。植生保護の外に、入山者の事故防止の観点からも、悪天候時には想像を超える危険があることや高齢者や山慣れない人には極めて危険なコースであることを、入山者や観光業者に対して更なるPRが必要であろう。

2. 植生復元への対応

今年は雷による集中豪雨（山の鼻ビジターセンター所長さんの話では90mmの雨量）のため、植生復元に関する調査がほとんど出来ませんでした。東面登山道は急傾斜地に加えてと蛇紋岩という特殊な条件下にあり、雨による土壌の流失が如何に激しいか、自然の厳しさを思い知らされました。従って、流失した土壌の回復と流失防止策を十分にとらないと植生復元は極めて困難と思われます。

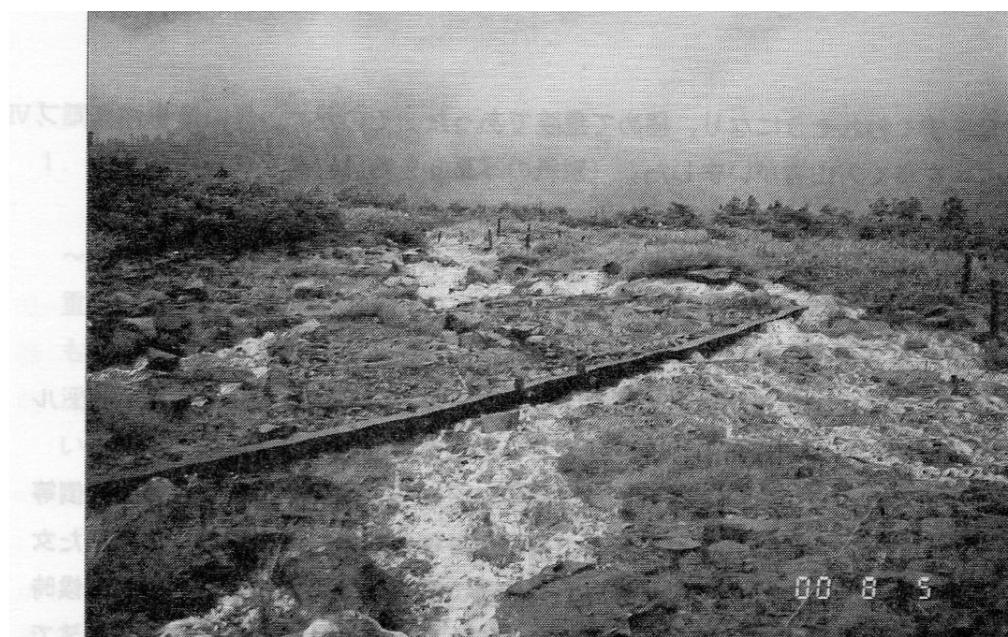
この様な状況からして平成9年の登山道再開は、入山者を迎えることを最優先し、植生の保護及び復元を軽視したものと言わざるを得ないと強く感じました。急傾斜地で裸地化した所は、岩石の露出し年々多くなり、このまま放置しておくと植生復元は、一層困難になるものと思われる所以、登山道再閉鎖と一刻も早い植生復元への本格的な取り組みを強く訴えたい。

まとめ

今年で4年連続（計5回）となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて思うことは、急斜面で止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元作業など、難しい課題が山積しています。一方、残雪期の登山道閉鎖の継続実行や入山者の減少など明るい動きも見られるが、私達（入山者や全ての関係者）は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任があります。

「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬の自然を、これ以上荒廃させてはならない。尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な施策（マイカー規制の強化、登山道閉鎖、入山規制等）が、一刻も早く着実に実施されるよう願ってやみません。

以上



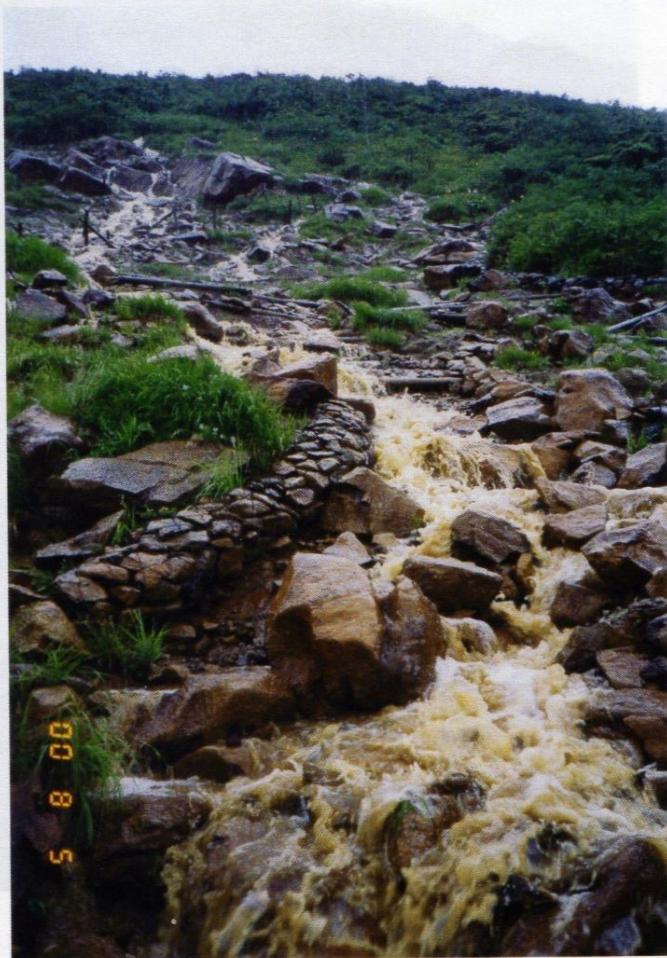
①木製の土壤流失防止柵／それなりの効果が見とめられる



②木製階段を流れ落ちる渦流／板が水圧で浮いて不安定で危険



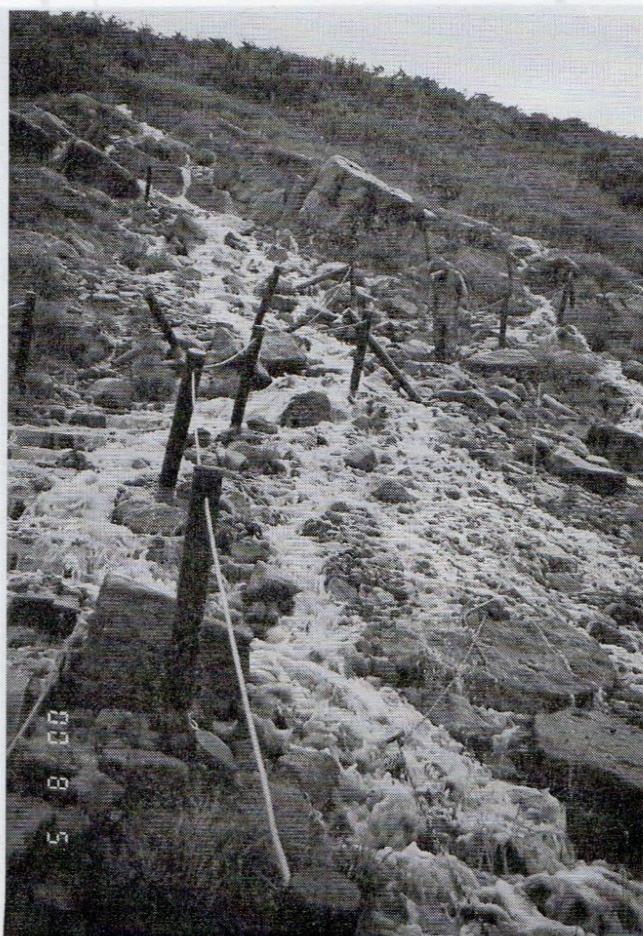
③「D地点」を上部より望む／激しい渦流が登山道を蝕む



④「D地点」を下部より望む／植生復元地の土壌が流失していく



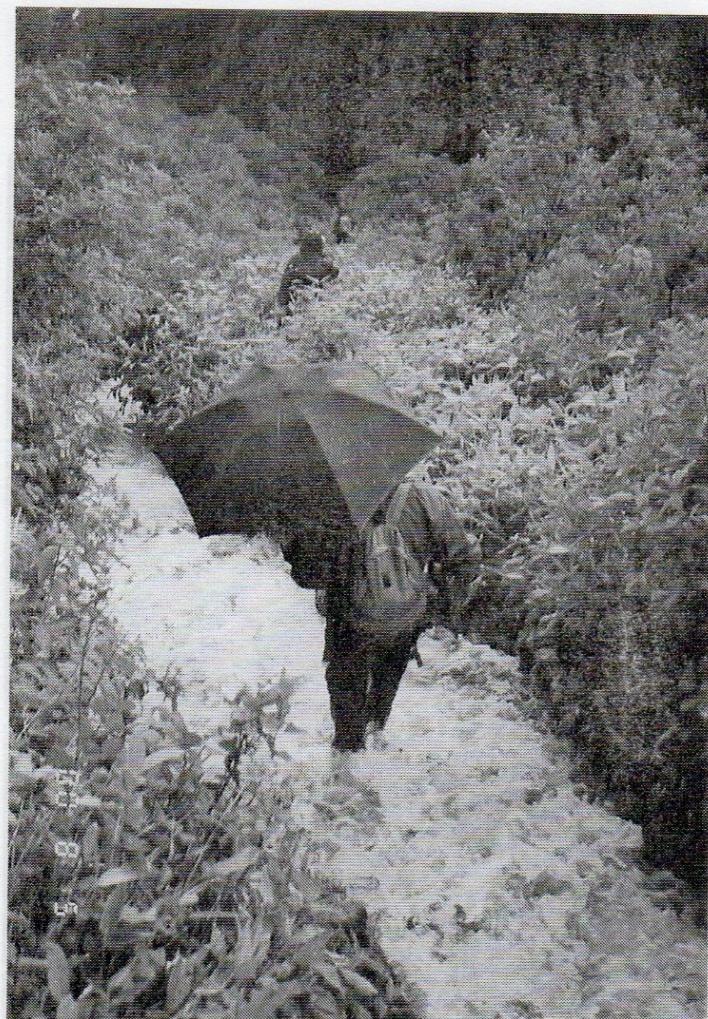
⑤濁流に洗われる「D地点」の登山道No 1／杭は倒れ、ロープは弛む



⑥濁流に洗われる「D地点」の登山道No 2 高踏⑧
○内の番号は高踏番号
图形内の植物名
で確認した結果

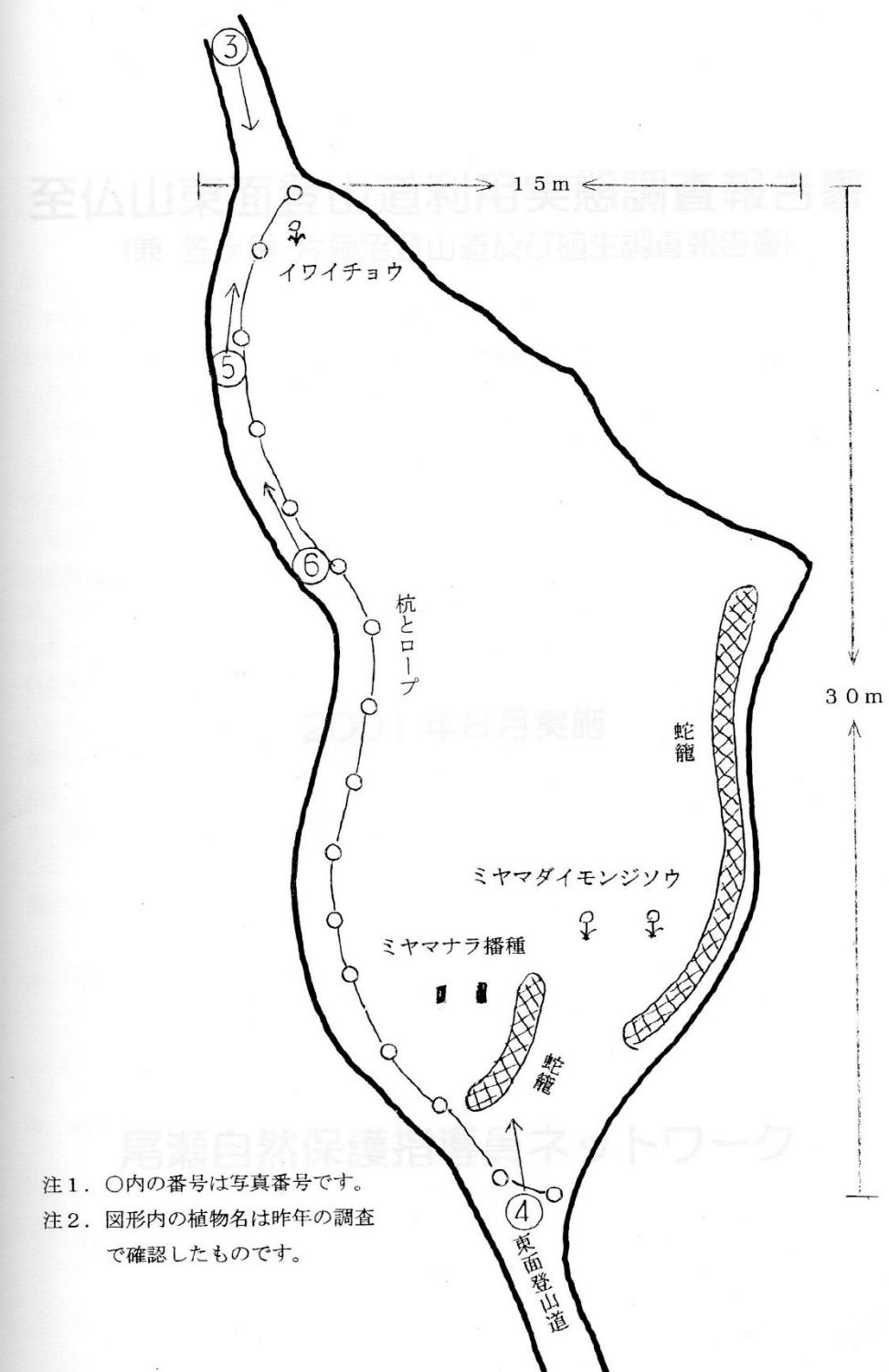


⑦林床から流れ落ちる雨水／蛇籠が土壤の流失防止となっている



至仏山東面登山道「D地点」拡大図
～ 標高1800m付近の登山道荒廃場所 ～

至 至仏山山頂



注1. ○内の番号は写真番号です。

注2. 図形内の植物名は昨年の調査
で確認したものです。